

文 華 苑 の 歴 史

— 蛙 股 池 —

文華苑の周囲には蛙股池が水を滴々と蓄えておりますが、現在では、水田の数も少なくなり、池の水の利用も少なくなりました。

この池は万葉の時代に造られたそうではありますが、池と言うよりも、ダムと言った方が適切かと思われれます。かつては、学園南の丘陵から出る水の水瓶であり、その水面は、文華館の駐車場、研究所まで広がっていたそうでもあります。

当然、この様な大きな水瓶には、魚類などの水生生物、或いは、それらを獲物とするサギなどの水禽も数多く生息していたのでしょう。当時の池の状態を考えてみますと、水はどこまでも澄み、人々は、その水を飲料水として利用し、魚を捕っては食料にしていたことでしょう。そしてまた、この池から小さな溜め池に水を送り、灌漑用水の貴重なダムとしての役目も果たしていたのであります。それは、人々の生活に密着したものであっ

たのです。

そのようなことを考えながら、現在の状態を比較してみますと、考えられないほど水は汚染されているのであります。浄化作用を果たしていた丘陵は住宅に変わり、大雨でも降れば、どろどろの鉄砲水が流れ込み、それと同時に、缶やビニールなどのごみが流れてきます。雨が降らなければ、家庭からの生活廃水だけが注がれるのであります。

今日ではこのように、ごみ溜めになってしまった池。利用が少なくなった池であっても、自然の生き物たちは生きていくための糧にしているのであります。

養魚を行っているために、晩秋になると、必ず池の水は干されます。干されることが一つのサイクルになり、干される前になりますと、決まって、サギ、カワウなどの鳥達が獲物を求めて数多くやってきます。

そしてまた、カモもこの時期に渡ってきます。ただし、干されることがありますので、そうするとどこかへ行ってしまう。過去に池に水があるとき、何百羽ものカモが飛来したことがあります。種類も5種類以上で、スズガモ、キンクロハジロ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、カルガモ、マガモであります。今では住み着いたカルガモ10羽程と、30羽程のマガモ、数羽のハシビロガモが毎年やってきます。しかし、水がなくなるとどこかへ飛んで行き、水が溜まってくると戻って来ます。

カモだけでなく、カイツブリ、バン、アオサギ、ゴイサギ、ヨシゴイ、オオヨシゴイ、カワウ、シラサギ、チュウサギ、そして、カワセミなども、この池を利用しています。

また、水鳥以外のほかにも多くの鳥達も生活の糧にしているのであります。カラス、スズメ、セキ

レイ、キセキレイ、ツバメ、キジバト、或いは、ヨシキリなどもこの池を利用していると言えます。

池の中を見ますと、放流される魚も含め、コイ、ヘラブナ、マブナ、モロコ、ゴリ、カワエビ、ザリガニ、タウナギ、タイワンドジョウ、タニシ、それから水生昆虫、カエル、カメ、ヘビなどもこの池を生きていくための糧にしているのであります。

かつては、現在見られるよりも、もっと多くの種類の生き物が住み着いていたことだと思います。獣達も水や獲物を求めてやって来たに違いありません。

蛙股池は、文華館の景観としての役目を果たしています。ごみ溜めの池になりつつありながら、私達馬鹿な人間には分からない様々な生物の営みの場であることを、忘れてはならないのだと思います。(保安員一同)

